



雇われ聖女の
転職事情 1

雨宮れん
Ren Amamiya



RB

レジーナ文庫

◀アーサー

聖騎士団第一部隊隊長。
生真面目で不器用。
玲奈をあまり良く思ってい
なかつたが……

ローウェル ▶

聖騎士団団長。
個性的な部下たちを
上手く仕切る。

ケネス ▲

ブラムの部下で魔術師。
玲奈にやたら懐いてしまう。

▲エリオット

アーサーの忠実な副官で、
玲奈に反発。小柄で女顔。

ザック ▲

聖騎士だが、料理の
腕が良すぎて厨房担
当も兼ねる。

▲トーマ

玲奈を聖女に選んだ
張本人。
普段は日本で大学
教授をしている。

▲ルーカス三世

サンクティア国王にして
玲奈の雇い主。
ハタレな俺様。

▲ブラム

聖騎士団第二部隊(魔術
師部隊)隊長。優雅で
穏やかだが腹は黒い。
バックスと仲良し。

▲バックス

玲奈の守護精霊。召喚時
に玲奈がワインのことを
考えたため、ワインボトル
の形になってしまった。

かぶらぎれいな

▲ 楠木玲奈

求職中の元OL。聖女として
スカウトされ、日給一万円で
魔物退治をすることに。
酒に強い。

仮の姿



目次

雇われ聖女の転職事情 1

7

書き下ろし番外編 幽霊なんて怖くない

365

雇われ聖女の転職事情 1

プロローグ

「はあ？ 給料……だと……！ せ、聖女が……金銭を要求するとは！」

アーサーは、苛立いらだつたような声とともに立ち上がり、短めの金髪を手でかき回す。

いかにもといった響しかめつ面かが、せっかくの美貌をだいなしにする——ここにいる四人は男ばかりなので何一つ問題はないが。

「おやおや、ようやく見つけた聖女様が召喚に応じてくださったというのに、アーサー君は何が不満なんですか？ 僕は聖女を探すため、日本に拠点まで移したんですよ？」

緊張感ゼロの声でアーサーに応じたのは、この狭く飾り気のない室内で一番年かさのトーマだった。大体四十半ばといったところか、黒い髪にやや色の薄い瞳をして、眼鏡をかけている。他の三人がシャツにズボンといった軽装なのに対して、彼だけはきつちりと黒いスーツを着込み、ネクタイまで締めていた。

「アーサー、落ち着いたらどうです？ あなた、鼻の血管弱いんですから。ほら、座って」

アーサーの左隣に座っていたブラムが声をかけた。年の頃はアーサー同様二十代半ば、落ち着き払った態度ではあるが、その端整な顔にある明るい茶の瞳は心なしか煌きらめいている。

ブラムに袖を引かれたアーサーは、言われた通りに腰をおろしかけ——何かに気づいたように中腰の姿勢でとまる。それから用心深く自分の背後に目をやった。

そこにあるべき椅子が、いつの間にかはるか後方に押しやられている。

「ブラム！——貴様！」

アーサーは声を張り上げ勢いよくテーブルをひっくり返そうとした。しかし彼の右隣に座っていたローウェルが、無言のままばん、と手のひらをテーブルに叩きつけ、そのまま押さえつける。テーブルに置かれていた茶器ががちがちと音を立てたが、倒れたものは一つもなかった。

「座れ！」

ローウェルはじろりとアーサーを見上げ、腹の底から響く低音で叱責した。窓を閉めきり、室温はかなり高いというのに、彼は白いシャツのボタンを一番上までとめ、汗一つかいていない。年は三十前後。黒い髪は無造作に撫なでつけてあるだけだ。

続いてローウェルはブラムをもいさめる。

「お前もほどほどにしておけ」

「尻餅をついたアーサーの怒りが違う方に向けばいいと思っただけです。そうすれば、聖女様の件についてゆつくり話せるでしょう？ わたしが一発殴られれば済む話だし」

ブラムがしれつと言ってテーブルの上で手を組み合わせると、ローウェルは額に手を当てた。

「ブラム……それは理由になってないぞ」

怒りのやり場を失ったアーサーは右手をぶるぶるさせていたが、やがて拳を下ろして椅子を引き寄せ、用心深く腰をおろす。

一連の流れを見ていたトーマは、芝居じみた仕草で肩をすくめた。

「話を戻しますよ？ ええと、僕は日本で聖女様を見つけた。彼女は魔物との戦いを快く引き受けてくださった——だけどその代わりにお給料がほしいとおっしゃった。これは、僕は当然の要求だと思うんですね、アーサー君。聖女様だって生活しなきゃいけないんですから」

「必要なものはすべてこちらで用意すればいいではないか」

アーサーは、納得していないのかむくれたまま言う。トーマは子どもに言い聞かせるかのように続けた。

「時代は変わるのでですよ。地球とイークリッド間を自在に行き来できるようになって以来、初めての召喚でしょう？ 聖女様は昼間、日本で過ごされるそうですから、そのための生活費は必要なんです」

「それで、教授はどう考えていらっしゃるのです？ 本当に支払うつもりなんですか？」

ブラムが視線をトーマの方に向ける。教授、と呼ばれたトーマは、その言葉を肯定するようににこにここと両腕を広げて見せる。

「ブラム君。聖騎士団は約束を違えたりはしないでしょう？」

「部外者は気楽でいいな」

ふくれっ面のアーサーが、ぼそりと言う。

「やだなあ、部外者だなんて。そりゃ僕は聖騎士団所属じゃないですけど」

やれやれとトーマは首を振る。いちいち芝居がかった仕草をするのが、この男の癖らしい。

ローウェルの眉間に皺しわが現れた。

「ブラム、アーサー。聖女様にも都合というものがある。協力してくださいというのなら、こちらこそ誠意をもって応えるべきだろう——前例のない話ではあるが」

腕を組み難しい顔をしてはいるが、トーマの話を受け入れる気になったようだ。

「ローウェル君は話が早くていいですねえ」

空気を読む気などまったくなさそうなトーマは、目の前の紅茶に遠慮なく手を伸ばした。つい今しがたの騒ぎの中でも、カップの中身は無事だった——ローウェルのおかげであるが。

ついでにトーマは、山盛りのクッキーの皿も自分の手元に引き寄せた。傍若無人ほうじやくぶじんにクッキーをほりほりかじる音が部屋に響く。彼以外の三人は紅茶にも菓子にも手をつけようとしなない。

「トーマ。一人で菓子を食べ尽くすのはやめなないか」

ローウェルの制止も、トーマの耳には入っていないようだった。彼は自分の紅茶を飲み干したところで、ローウェルの前にある手つかずのカップと自分のカップを取り換える。

「こちらとしても玲奈れいなさん——ああ、僕が見つけた聖女様なんですけどね、彼女を逃すわけにはいかないんですよ。聖女たる資質を備えた人は最近どんどん少なくなっているんですから」

トーマの言葉に、残る三人は黙って耳を傾けている。

「多少の金銭くらい、いいじゃないですか。今まで召喚した聖女様たちにだって十二分にお礼はしてきたわけですし。契約してお金を払うか、相手の好意にお応えする形でお金を払うか、どちらを選んでも同じでしょう？」

「それにしても、金銭要求とは……」

ぶつぶつ言っているアーサーを無視して、トーマはローウェルに話しかける。

「というわけで、明日聖女様をお連れします。謁見えっけんの手続きをお願いしてもよろしいでしょうか？」

「こちらでやっておこう」

「では、僕はこれで。聖女様のお部屋も用意しなければなりませんねー。お城にお世話係の侍女さんお願ひしてきますよ——聖女様、本当に来てくれればいいんですけど。彼女が約束の時間に来なかつたら、記憶消去しなきゃですけど、あれ面倒だし」

トーマはべらべらと自分の言いたいことだけを言っさつさと立ち去った。

「……大丈夫なのか？」

不満と不安をはらんだアーサーのため息だけがやけに大きく響く。

ブラムとローウェルは顔を見合わせたが、その問いには答えようとしなかった。

第一章 聖女の契約

トーマが皆を集める数時間前のこと。

日もすっかり暮れた住宅街を歩いてきた鏝木玲奈は、重い足取りで自宅アパートの外階段を上った。

黒いコートの中は灰色のスーツ。手にはビジネスバッグとコンビニ二袋。彼女は本日、面接を一つ終えて帰宅したところだった。

玲奈がひと月前までつとめていた会社は倒産してしまった。貯金がそれほどあるわけでもなかったからすぐに就職活動を始めたが、これがなかなか上手くいかない。今回、書類選考はなんとか通過したけれど、面接では焦って上手く話せなかった。二次選考に進むのは難しいだろう。

左手のコンビニ二袋にはビールとスモークチーズ。なかなか酔うことのできない酒飲み体質が恨めしいが、今日のところはこれを飲んで失敗した面接のことは忘れてしまおう。鍵を鍵穴に差し込み、右に回してドアを開く。

その瞬間、玲奈は凍りついた。

「し、失礼しました！」

思わずドアを閉めて立ち尽くす。今見た光景が信じられなくて、しばらくその場で考え込んでしまった。

「いや、……別に部屋間違っていないでしょ……」

再び鍵を鍵穴に差し込み、今度は左に回してみる。かちりと音がした。ドアを引いてみれば、しっかりと鍵がかかっている——自分の持つ鍵で施錠されたということは、ここは自分の部屋で間違いない。

思いきって、もう一度鍵を回して扉を開く。さっきの光景は消えているかもと期待しただけれど、そんなことはなかった。

「……」

本来なら、ここは玲奈の住む六畳ワンルームのはず。

だが、そこに広がついていたのは、とんでもなく広い部屋だった。六畳の何倍あるのかわからない。おまけに壁が全て鏡になっているから、ただでさえ広い部屋がより広く見える。言うなれば、歴史の教科書で見たベルサイユ宮殿の鏡の間だ。

不釣り合いなのは、その広い広い部屋の中央に置かれているこたつだった。ご丁寧に

みかんの入ったざるまで載っている。そしてそのこたつには男が一人座っていた。

「……手品？」

「そんなはずないでしょう」

呆然と玲奈がつぶやくと、こたつの男が玲奈に声をかける。

室内には、そのこたつ以外に家具はいっさい置かれていなかった。それに今玲奈が開いている扉以外、出入り口もなさそうだ。

「玲奈さん、そのままというのも何ですし、あがりませんか？」

男はこたつに座ったまま、にこにこ話しかけてくる。

玲奈は顔をしかめて彼を見つめた。この顔に見覚えがあるような気がしてならない。自分の名前を知っているということは、どこかで会っているのだろうか？

「玲奈さん。あがりませんか？」

もう一度促されて、玲奈はおそろおそろ靴を脱いだ。

この事態に頭がついていかないけれど、どうしたらいいかわからないので、とりあえず彼の言葉に従ってみる。

こたつに近づいてコートを脱ぎ、バッグとコンビニ袋を床に置くと、彼と向かい合う位置にもそもそと潜り込んだ。こたつは適温に調節されていて、入るとほっとした。

ふうつと安堵の息をついて玲奈は正面に座る男に目をやる。やっぱり彼とは初対面のような気がしない。絶対どこかで会ったことがあるはず。思い出そうとしているうちに、彼の顔から目を離せなくなった。

品のいい茶のスーツ、上品なえんじのネクタイに真っ白なシャツ。少々白髪しろがが混ざっているけれど、きつちりと清潔感溢れる形にカットされた黒い髪。それに眼鏡と――何よりその穏やかな微笑み。

「じーつと僕の顔を見てどうしました？」

「どこかで会った――あっ！」

玲奈は思わず大声を上げた。

「東間慎二！」

「人の名前を呼び捨てにするのは失礼ですよー？」

道理で見覚えがあるはずだ。会ったことがある、ではなくて、見たことがある、が正解だった。

今日の前にいる男は、テレビでしばしば見る顔だ。清潔感あるビジュアルと穏やかな口調で主婦層に大人気。情報番組には欠かせない存在になりつつある有名な大学教授だ。

「東間先生？」

「ええ、まあ——そう呼ばれていますね、こちらでは」

「……こちらでは？」

「とりあえず、お茶でもいかがですか？」

飲み物を勧められて、コンビニ二袋に入ったビールのことを思い出す。どうやら冷蔵庫はないようだが、このままではせつかく買ったビールがぬるくなってしまふ。ちらちらとコンビニ二袋に視線を送っていると、東間の目もそちらに向けられた。

「おや、その袋の中身、ひよつとしてお夕食ですか？」

「い、いや、これは……」

夕食ではなくビールとチーズだ。ひよいと袋を手にした東間は、中からビールを取り出す。

「よろしければ、これでも？ グラスをお出ししましょうかね」

「か、缶のままです！」

思わず大声で即答し、ビール缶を受け取ってしまう。うっかり東間のペースにはめられたが、本当に飲んでもいいのだろうか。

ちらりと向かいを見れば、東間はこたつの横に置いてあった盆から急須きゅうすを取り上げ、丁寧な手つきで緑茶をいれているところだった。

まあいいか、とつぶやいて玲奈はブルタブを開ける。どうせ今夜は飲むつもりだったのだ。場所が予定とは異なってしまったが、かまわないだろう——頭のどこかから聞こえてきた「現実逃避」という言葉は無視することにした。

「いい飲みっぷりですねえ」

一息に缶の半分を空にした玲奈に、東間は感心したような目を向ける。そしてにこにこ話し始めた。

「驚きましたよね？」

「そうね……うん、まあ、驚いたと言えば驚いた」

本当は驚いたところではない。

自分の部屋はなくなっているわ、代わりにベルサイユ宮殿が広がっているわ、その中央にこたつがあるわ、さらに座っているのはテレビの中の人、とくれば玲奈の理解の範囲外だ。

これからどうすればいいのだろう。平然としているように見えるかもしれないけれど、正直いっばいっばいだ。だから無言でビールを口に運ぶ。

頭をめぐるしく回転させても答えなんて見つからない。玲奈は次第に自分が本当に冷静になってくるのを感じた。ビールをぐびつともうひと口飲んで、この際だからとス

モークチーズの袋も開いて差し出す。

「よかったらどうぞー」

「いただきますー」

東間の方も遠慮しない。玲奈の勧めたスモークチーズを一口に運んで微笑んだ。

そしてそのままの笑顔で切り出してくる。

「えっとですね、あなたにお願いしたいことがあるんですよ」

「……お願いしたいこと?」

「ええ」

東間はお茶を口にして一息つく。

「『聖女』をやってみませんか?」

「はあ?」

耳慣れない単語に、玲奈の声が裏返る。東間は気にした様子もなく、にこにこしながら繰り返した。

「『聖女』、ですよ」

「意味わかんない!」

玲奈は勢いよくこたつから立ち上がろうとする。『聖女』だなんてそんな電波な言葉

を容易に受け入れられるはずがなかった。

「まあまあ」

東間は穏やかな手つきで玲奈の腕を掴んで引き戻す。意外に力が強い。振り払おうにも振り払えず、玲奈は渋々こたつに戻る。

「ビール、大好きなんですネ? よかったらもう一本いかがですか?」

「——いただきます」

東間に悪気はなさそうだけれど、その笑顔の胡散臭さはぬぐえない。

東間が空中で手をひらひらさせると、次の瞬間、彼の手にビールの缶が現れた。どこから現れたのかは、気にしないことにする。

「……これってば夢なのよね……」

「違います。現実逃避はやめてくださいね?」

玲奈はビールを受け取りプルタブを開ける。これが夢でないのなら、自分の頭がおかしくなったのかもしれない。

缶の中身を勢いよく喉に流し込んでから、何か変なものが仕込まれている可能性に気がついた。遅いとはわかっていても、缶を凝視してしまふ。

「大丈夫ですよー、何も入ってないですから。あ、僕のことには『教授』、もしくは『トー

「マ」って呼んでくださいねー」

テレビで奥様方を夢中にさせている微笑みも、今の玲奈にとっては怪しいことこの上ない。早く自分の部屋を返して——いや、自分を部屋に帰して？——ほしいけれど、それを口にすることもできなかった。

「さてー、どこから話しましょうかね」

「聖女っていうのは？」

とにかく話を聞かなければ解放してもらえない気がする。それならばさっさと終わらせた方がいいと思ひ、玲奈は東間改めトーマを促した。

「まず初めにお話ししておきますが、実は僕、あなたたちの世界の人ではないんですよ。言ってみれば異世界人ってところでしょうか」

「……帰る」

「どこに帰るんですか。ここがあなたの部屋ですよ……露骨に信じないって目をしないでくださいよ。現実としてあなたの部屋がこうなってるのを見れば何となく信じてもいかなーって気になりませんか？」

トーマは腕を広げてみせる。玲奈はとりあえずスモークチーズを手にとって口に運ぶ。

「そんな気にはならないけど——話を聞かないと帰してもらえないなら、さっさと続

けて」

「それでね、僕の暮らしている世界では——ああ、イークリッドって僕たちは呼んでるんですが、人間や精霊たちが同居していて、時折別の世界から魔物もやってくるんですよ」

「ゲームみたい」

熱心なゲーマーではないが、イラストの可愛いRPGなら何作かプレイしている。RPGばかりなのは、時間さえかければ確実にエンディングにたどりつくから。どうやら反射神経を必要とするゲームは向いていないらしい。

「そう言われてみればそうですね。それはともかく、話を続けますよ？ 精霊と人間は仲良しなんですけど、魔物は違うんですよ。人間は魔物の餌なんです」

「ぶえええつふう！」

玲奈はむせた。それはもう盛大にむせた。ビールが鼻に入って痛い。こたつの天板をばんばん叩いて悶絶している玲奈にはかまわず、トーマは話し続ける。

「一応、我々の方も手は打っていてですね。魔物と戦う能力を持った聖騎士と呼ばれる者たちが退治してはいるんですよ。ただ、彼らだけでは力不足でしてね。そこで『聖女』が必要となるんですよ」

「うー」

涙目のまま、玲奈はこくこくと首を縦に振った。彼の言うことは半分も理解できていないけれど、とりあえず聞いているというアピールだけはしておく。

「『聖女』は、身体能力も高い上に非常に高い魔力を持っているため、たやすく魔物を倒すことができるんですよ。問題といえば、『聖女』はイークリッドには生まれませんこととしてね。こちら側——玲奈さん、あなたたちの世界にしか生まれません。ですから僕らは、聖女たる資質を持った人を見つけるためにイークリッドにお招きしています。それがあなたなんです」

「それで？」

「しばらくの間、魔物退治のお手伝いしてもらいたいですよ。聖女が姿を見せるだけで、低級な魔物はびびって姿を消しますからねえ」

「信じられない！ だってわたし普通の人間だし」

玲奈は疑わしそうに見やるが、彼が気にする様子はない。

「こちらではそうですね。でもイークリッドでは違います。だから『聖女』なんですよ。それで、玲奈さんお願いします。しばらくお手伝いしていただけませんか？」

話が進みます怪しくなってきた。何が目的で彼はこんな話をしているのだろう。だま

してどこかに連れて行くつもりとか？ それにしては話が胡散臭^{うさんくさ}すぎるし、美人でも何でもない玲奈を連れていったところで、何かいいことがあるとも思えない。

ようやく鼻の痛みが治まってきたので、缶を一気に空ける。玲奈に酔う様子がないのを見たトーマは、空中から新しい缶を取り出して渡してくる。

「お手伝い、ねえ」

プルタブを開けながら、玲奈は眉を寄せる。いきなりそんな話を聞かされても、信じると言う方が無理ではないだろうか。

「論より証拠って言いますよね？ わかりました、今からちょっと見に行きましょう」

「ちよい待てっ！」

今缶を開けたところなのに——いや、問題はそこではなかった。

「どこに連れて行くつもり？」

「我々の世界——イークリッドに、ですが」

「そんなあつさり言わないでよっ！」

「何ですか？」

トーマは首を傾^かげて玲奈を見ている。その様子に悪気は見受けられなかったけれど、素直についていくのは怖い。だいたい、異世界なんてそんなちよつと見に行く〴〵なん

てノリで行けるような場所ではないと思う。

「ああ——大丈夫ですよ。本当にちょっと行ってすぐに帰ってきますから——あ、聖女を引き受けていただけなかった場合は、ここでの記憶は消去させてもらいますねー」
 につきり。トーマは完璧な笑みを浮かべてみせる。今後、情報番組で彼を見かけたら反射的にチャンネルを変えることになりそうだ。

「記憶を消去って——」

「大丈夫、痛いとかいうことはないですから。僕のことですっぱり忘れてしまいますよー」

トーマはぐいぐいと玲奈の腕を引く。どうやら行かないという選択肢はなさそうだ。

玲奈は深々とため息をついた。

「——わたしスーツなんだけど」

どこに行くにしたって、もつと楽な格好の方がいい。

「いえいえ、そのままでもかまいませんよ。あ、今あたりは夏ですからコートはいりません」

ひょいと立ち上がったトーマは玲奈を振り返った。

「靴持ってきてください。このまま外に出ることになりますから——この部屋は、イークリッドと日本を結ぶ道——『ルート』にあたります」

ここはそんな場所だったのか。どうやらとっくの昔に巻き込まれていたらしい。玲奈

は眉を上げた。

「そんなものはいはい作れるわけ？」

「作れませんよ。神官に頼んで開いてもらわないと——昔は開くのがもつと大変で、聖女様には長期滞在していたただかなくてはならなかったんです。いつも使っているルートは別のところであって、あなたの部屋に作ったのは特例ですよ。あちこちに開くわけにもいかないですしねー。ほら、行きますよ」

ここまでくれば腹をくぐるしかないだろう。入り口に一度戻って靴を取ってきた玲奈は、どんだん部屋の奥へと歩くトーマについていく。突き当たりの壁まで来た時、初めてそこにちょこんと男性用の靴が置かれているのに気がついた。

壁をよく見れば、鏡の一枚がずれて隙間ができていた。トーマがそこを押すと、鏡は大きく外側に開かれた。玲奈は思わず目を伏せる。

「さて、ここがイークリッドです」

異世界に行くのだから、身体に何か変調があるのではと思っていたのに、そんなことはないらしい。あっさりと別の世界にたどりつき、脱力する。

「玲奈さん、どうぞ？」

トーマが手を差し出す。玲奈はそれにかまわず靴に足をつっこんだ。

この足を踏み出したら、自分の知らない世界に行くことになる。どうするべきか迷ったのは一瞬のこと。

大きく息を吸い込んで、前を見る勇氣もいまま扉の外へ踏み出した。

「できれば靴じゃなくて、景色を見ていただきたいんですがねえ?」

トーマの言葉にのろのろと顔を上げる。

「うわっ!」

そこに広がっていたのは、玲奈の日常とはかけ離れた光景だった。

「……外国?」

玲奈の貧弱なボキヤブラリーでは、そんな言葉しか出てこない。日本では外が真っ暗だったけれど、こちらでは日が沈もうとしているところだ。夏だから日が暮れるのが遅いのだろう。

街灯はなく、あたりは薄暗かったけれど、ヨーロッパ風の石造りの建物が並んでいるのがわかった。ほとんどの建物が二階建てで、高くても三階建てくらい。いずれの建物にもきちんとカーテンがかけられている。

ぴかぴかしたネオンや目立つ看板などもないことから察するに、ここは住宅街なのかもしれない。初めて見るのになどこか懐かしい印象を受ける街並みだ。

玲奈の目の前の家で、一人の男が扉を叩き始めた。すぐに同じ年頃の女性が出てきて、入り口のところで軽く抱き合ってから中へと消えていく。

「玲奈さんから見たら外国かもしれないですね。実際日本じゃないですし——ここはイークリッドにあるサンクティアという国です」

軽やかな笑い声を上げて、トーマは玲奈を促した。それに従ってもう一步踏み出す。もう一步進んで振り返れば、玲奈たちが出てきたのは白くて小さな家だった。窓にかかっているピンクのカーテンが可愛らしく、出窓には花の鉢植えも並んでいる。

いい年した男が出てくるにしてはやたら少女趣味な建物だな、とは思ったけれど、口に出すのは遠慮しておいた。そのくらいの良識は持ち合わせている——つもりだ。

「少し歩いてみましょうか。街の様子を見てみたいでしょう? 日本とは少し違いますしね」

「本当にちゃんと帰れるんでしょうね?」

「その点はお約束しますって。僕も普段はあっちで生活してるんですから——ご存知でしょ?」

確かに東間慎二と言えば、玲奈もよく知る有名人だ。情報番組の出演の他に、本業である大学教授の仕事もあるはず。生活の基盤が日本になればやっていけないだろう。

彼についていけばとりあえずここに取り残されることはないだろう、と玲奈は自分を無理矢理納得させる。この場で回れ右をしてあの部屋に戻ることも考えたけど、やめておいた。

そうしたのとはたぶん、トーマから得体のしれない威圧感を感じたからだ。玲奈の中で彼を表す言葉が、自然に「人がよさそう」から「裏がありそう」に変化する。

歩きながら再び目を落とすと、足元は石畳だった。アスファルトはこちらには存在しないのだろうか。

「……暑い」

こぼした玲奈は、スーツの上着を脱いで腕に抱える。そう言えば、あの鏡張りの部屋は涼しかった。こたつはあったけど。

「このあたりがメインストリートと言ったところでしょいか」

トーマの言葉に慌てて周囲に視線を走らせる。いつの間にか最初に出てきた住宅街を抜けていた。

すぐそこにある店はカフェだろうか、店の前にテーブルと椅子が並んでいる。ウインドウに華やかな洋服を飾っている店は、女性用の服屋だろう。花屋の店先では、男性が花束を買い求めている。

行き交う人の姿は先ほどの住宅街より格段に増えていたけれど、自転車だとか車だとか、玲奈の知っている乗り物は目に入らない。

がらがらという音に慌てて飛び退けば、勢いよく馬車が通りすぎていった。歩道と車道(?)の区別もないようだ。文明的には日本の方が進んでいるのだろうか。

そういうえば歩いている人たちの服装も妙に古めかしい気がする。男性は同じ布で作った上着とズボンが一般的のようだった。たぶんスーツという表現が一番近いのだろうけれど、上着の裾はそれよりずっと長い。また多くの人が頭に帽子を載せていた。

女性の服装で目立つものと言えば、地面を擦らないぎりぎりの長さのスカートだ。ブラウスとスカートを組み合わせたり、一枚仕立てのワンピーススタイルだったりとコーディネートはさまざまだけど、皆この暑いのに首のところまできっちりボタンを留めている。髪は後頭部で束ねてリボンを飾るか、そうでなければアップスタイルで、下ろしたままという人はいない。

正直野暮つたいなー、と思いながら玲奈は人々の服装を観察していたが、ふと浮かんだ疑問をトーマに投げつける。

「街中には魔物とやらは出ないわよね?」

「出ますよー」

玲奈がひきつるのを余所よそに、けろりとした顔でトーマは言う。

「出たら、基本逃げるしかないです。それでも街中は比較的安全ですけどね——周囲には結界が張ってありますし」

「結界が張ってある？」

「それでも完全ではないですが、まあ、街の外よりは安全です」

玲奈が若干ビクビクしながらトーマについて歩いていると、ふいに辺りの空気が変わった。二人が向かっていた方角から、多数の人たちが走ってくる。皆一様に怯おびえた表情で、中には怪我をしている人もいる。玲奈は背筋が寒くなるのを感じた。

「逃げ！」

「この先だ！」

後方から緊迫した声が聞こえてくる。玲奈が振り返ると、腰に剣を吊ったり弓矢を持ったりした男たちが走っていくのが見えた。全員、膝まで届く鮮やかな青の上着を身につけている。

「ああ——『聖騎士』たちの出番ですね」

「聖騎士？」

「先ほどご説明したでしょう？ 魔物と戦う能力を持った人たちです。早速魔物が出た

みたいですね。この際ですから、ついて行ってみましょうか」

先に進むとたくさんの人が、『聖騎士』たちが走っていったのとは逆方向に逃げていく。

「早く行かないと終わっちゃうかなあ」

なんてのんきなことを言いながら歩くトーマについていくと、前方から激しい物音が聞こえてきた。

トーマは落ち着いたままだが、少しだけ早足になる。玲奈も思わず小走りになった。

たどりついた先は、T字路になった場所だった。目の前で繰り広げられている光景に玲奈の目が丸くなる。

何やらうねうねぐにぐにした緑色のものが石畳の上でのたうち回っている。

玲奈の知っている生き物でたとえるなら、アメーバが一番近そうだ。たえず身体の形を変えながら、見た目に似合わぬ素早さで移動している。一体だけならともかく、それが数十もうごめいている光景は、何とも気味が悪く目を覆いたくなる。

思わず手が頬に伸びた。いや、今までそうしなかった方が不思議なのかもしれない。

「……痛い」

「夢だと思っていました？ 残念でしたー」

自分の頬を思いきりつねっている玲奈の横で、あははとトーマが笑った。いい根性し

ている。

とりあえず魔物に気づかれないよう、二人は建物の陰に身を潜めた。

聖騎士たちは二手に分かれて戦っているようだった。総勢十五名ほどで、弓や杖のよ
うなものを手にした五名は、他の聖騎士たちから少し離れた位置に下がっている。

最前線にいる見事な金髪の持ち主に、玲奈の視線が吸い寄せられた。彼が手にしてい
るのは、両手持ちの大剣だ。それを軽々と操って、魔物の身体を切り裂いていく。

「彼はアーサーです。聖騎士の第一部隊隊長ですね」

その剣さばきに見とれる玲奈に、トーマが説明してくれた。

その説明が終わるか終わらないかのうちに、うねうねぐにぐにした魔物の身体から紐
のようなものが伸びて、アーサーの足に巻き付こうとする。

それを、素早く切り払ってアーサーは叫んだ。

「ブラム！ ぼやぼやするな！ 援護が足りないぞ！」

「エリオット、弓の援護が欲しいですよ」

アーサーの言葉を全く違う方向に変換したのは、後方にいる聖騎士たちの一人だった。
彼はそう言いながら曲がりくねった杖のようなもので火の玉を生みだし、魔物に反撃
する。

「バカ！ 違うだろ、ブラム！ お前の魔術がだな——！」

そう叫び返しながら、アーサーはもう一度刃を閃かせる。次の瞬間、魔物の身体が千
切れて飛んだ。

「うわあっ」

一人の聖騎士が、別の魔物から伸びた紐に足を取られて引きずられる。剣を地面に突
き立てて懸命に抗うが、それでも少しずつ魔物の方へ引き寄せられる。

「チェスターを放せ！」

騎士たちの怒声が響きわたる。

「チェスター、剣を離して頭を覆ってください！」

ブラムの声が高く響く。チェスターがそれに従うのと同時に、炎の玉が宙を切り裂い
た。チェスターの足を掴んでいた魔物が、炎に焼かれて身を振る。

「チェスター、大丈夫か。お前は下がれ！ 空いたところはロイドが埋める！」

アーサーと同じように前に出ている聖騎士は他にもいるけれど、やけに彼に目が引き
つけられるのは、彼が大剣を振るいながらも次から次へと指示を飛ばしているからだろ
うか。

魔物たちが左右に分かれて聖騎士たちを包囲しようとする。ブラムの放った炎が魔物

の行く手を阻んだが、魔物たちはじりじりとT字路いっぱいには広がろうとしていた。
「アーサー、敵を全部東に寄せてください！　そこに集中して魔術を叩き込みます！
ケネス、東の道を塞ぎなさい！」

三度連続して炎の玉を放ったブラムが声を上げた。ブラムの指示を受けた騎士が、T字路の東側の道に氷の壁を出現させる。壁にぶつかった魔物は、行き先を失ってうねうねと身体を震わせた。

「ブラム、全部寄せろって、お前むちゃくちゃだ！」

アーサーが叫ぶ。身体を震わせていた魔物たちは、その声の方角に新たな目標を定めようだった。身体から伸びた紐が、獲物を求めて地面を這う。

「やってください。できるだけでしょう？」

「くっ……お前たち、東に寄せろ！」

アーサーの声が夜の空気を裂いて響きわたった。剣を振るって紐を切り払い、魔物たちを東に追い詰めていく聖騎士たちの動きに合わせるように、後方から矢が飛ぶ。

いつの間にか魔物たちは全て氷の壁に押し付けられていた。形勢不利を悟ったのか、氷の壁を登って逃げようとするが、それを目掛けて矢が飛ばされる。加えて最初に作られた氷の壁の上にもう一枚壁が作られ、魔物たちの逃げ場を奪う。

「——行きます！　離れてください！」

ブラムが叫ぶのと同時に、前にいた騎士たちが勢いよく後ろに跳びすぎる。今まで壁に追い詰められていた魔物たちが自由を取り戻したとばかりに道に広がり始めた瞬間——今までの炎の玉とは比較にならないほどの巨大な火柱が立ち上った。

魔物の身体が炎に包まれる。炎に焼かれ、地面をのたうち回っている魔物は、紐を出して自分の身体を叩く——何とかして火を消しとめようとしているかのように。

けれどそれは、聖騎士たちにとっては攻めに転じる好機でもあった。
「とどめをさせ！」

アーサーの声が響く。剣や槍を手にした聖騎士たちが一斉に魔物に打ちかかる。

もともと統制などとれていなかった魔物たちは、炎に包まれたことで完全に動きがばらばらになっていった。こうなれば、聖騎士たちが圧倒的に有利だ。さほど経たないうちに現場にいる全ての魔物にとどめがさされ、消滅する。

玲奈は言葉もなくその光景を見つめていた。映画のような、とか、ゲームのような、と簡単に言い表すことはできるが、いずれにしろあまりにも現実とはかけ離れていた。

少なくとも、彼らが相手にしている生き物は玲奈が見たことのないものだし、聖騎士たちの身につけている装束にも馴染みがない。いかにも重そうな剣を軽々と振り回す男

だの、やすやすと炎を操る男だのも玲奈の身近には存在しなかった。戦いを終えた聖騎士たちがそれぞれ状況を確認し合う。

「ブラム、そっちの怪我人は？」

「ケネスが転んで手を擦りむいたぐらいです。そちらは？」

「重傷者はいない——魔物の生き残りがいないか確認しろ」

アーサーの言葉に、聖騎士たちはばらばらと散っていく。

「あの人たち、これからどうするの？」

「魔物の生き残りがいなければ撤収します。いれば——この場でもう一戦、ですね。撤収まで見守る必要もないでしょう。まだ見たいところはありますか？」

トーマの問いに、玲奈は首を横に振った。今見たものが現実か否か——頭がついていかない。

「では、戻ります？」

今度の問いには首を縦に振る。元の鏡張りの部屋に戻るまでの間、玲奈は口を開く余裕もなかった。剣とか弓とか持った男たち——中には魔法使いもいた。彼らと一緒に戦える自信はない。

二人が歩いている間に、街は元の賑わいを取り戻していたけれど、玲奈はそれにも気

づいていなかった。トーマが開いた扉を無言でくぐり抜け、そのままたつに潜り込む。

気を落ち着けたいな、と思っていると、新しいビールが目の前に差し出された。

「ま、あんな感じです。どうです、やっていただけますか？」

玲奈はビールを喉に流し込んでから唸った。どうだろう、できるだろうか。

「わたし……剣とか持ったことないんだけど」

「大丈夫ですよ、基本必要なのは魔力ですからねー。それに、身体能力も日本にいる時よりずっと高くなるんですよ。オリンピック選手なんて目じゃないくらいに。それにイークリッドの人間よりずっと高い魔力がプラスされるんですから、無敵と言っても過言ではないでしょう？」

そう言うトーマの口調は軽かった。彼は新しいお湯を急須きゅうすに注ぎ、しばらく待ってから自分の湯飲みにだけお茶を注いだ。ビールを飲んでいる玲奈には必要ないという判断らしい。

「……一つ聞いてもいい？ あっち？ いや、こっち？ ——日本？ に帰ることはできるの？」

「もちろん帰れますとも。イークリッドが聖女を呼ぶのは今に始まったことではありません。何百年も前からあなたがたの世界の人たちに助けられてきました」

「……何百年も？」

そんなに昔から聖女を呼んでいたとは思わなかった。玲奈の驚きはトーマの予想の範囲内だったらしく、困惑することなく彼は続けた。

「ええ。中にはそのままイークリッドにとどまることを選んだ方もいらっしやいました。元の国では待っている人もいない——と。地球も平和な時代、平和な国ばかりではありませんでしたからね。ある時代には『魔女』と呼ばれて火炙りになるところだった方もいたようですし」

「帰りたいて言った人は？」

戻ることを望んだ者はどうなったのだろう。玲奈はトーマの次の言葉を待つ。

「玲奈さん、神隠しって言葉をご存知です？」

予想に反して、彼の口から出てきたのは、ずいぶん古めかしい言葉だった。

「……ある日突然行方不明になる。そうして、数日後、あるいは何年後かに戻ってくる——ってあれ？」

「そう、往々にして行方不明になっている間の記憶は失われているとも言うでしょう？」

「ひよっとして」

玲奈の推測を、トーマはにこにこしながら肯定した。

「神隠しにあったすべての人が、とは言いませんが、そのうちの何人かはイークリッドで聖女として働いてくださった方ですよ。昔はルートを開くのが大変でしたから、長期滞在していただきましたが——期間としては、三年間くらいでしょうかね。イークリッドのことが広がるのはちょっと困るので、念のためお帰りになる時に記憶を消去させていただけます」

やっぱり引き受けるわけにはいかない。

「わたし、今就職活動中で、三年もイークリッドにいて、しかも記憶消されるなんてものすごく困るんだけど——だからちょっと無理だと思っ」

三年行方不明で記憶を失って戻ったとなれば、恐ろしいことになりそうだ。きつと病院に長期入院させられて検査を受けさせられる。注射は嫌いなのに、と何故か全然関係ないところで玲奈は怯えた。

「玲奈さんがお望みなら、毎日だって帰ることができますよ——我々の世界のことを口にしないというお約束をしていただくことになりましたが。でもまあ、玲奈さんも口外しないでしょ？」 頭がおかしくなったと思われてしましますからね」

確かにそれは非常に困る。やるにしても絶対に口を閉じておこう——って、聖女なんて全くもってやりたくないのだけれど、どうもトーマに逃げ道を塞がれているような

気がする。そんな玲奈の背を押すように、トーマは付け足した。

「それと、就寝場所はこちらで用意させていただきます」

「寝る場所を？」

「ええ。玲奈さん用のお部屋です。魔物は夜に出るので、その間こちらで待機していただきますが、いつでも外に出られる準備をいただければ徹夜する必要はありません。ああ、朝食と夕食もおつけしますよ」

「……今、ご飯もって言った？」

毎日自分で食事を用意するのは面倒くさいし、賄い付きなのはいいかもしれない。そんなところに惹かれて聖女を引き受けるというのもどうかと思うけれど。トーマはさらに押ししてきた。

「お望みなら和食も用意できますよ？ 刺身は日本の方がおいしいですが、天井でもサバの味噌煮でもご希望のものがあれば」

「天井？」

玲奈は目をばちばちとさせる。天井にサバの味噌煮だなんてまるで定食屋ではないか。街並みはまるで外国のようだったし、逃げまどう人々の服装も玲奈から見れば少し昔の外国っぽかったと思うのだけれど。

「意外でしょうけど日本の文化をよく取り入れているのですよ。主に僕の好みで、ですがね」

「はあ……」

「どうです？ 引き受けていただけませんか——いえ、玲奈さん、あなたの力を貸してください。聖女の存在で救われる人命がいくつもあるのですよ——一年。一年でかまいませんから！」

ずいずいとこたつが玲奈の方へと押しつけられる。さらにトーマは身を乗り出し、玲奈の両手を握りしめた。

「あー……そう、そうね……」

彼の押しに勝てる気がしない。それほど押しに弱い性質ではないはずなのに、トーマには断ることを許さない雰囲気がある。

それに玲奈が引き受けなければ何人も死ぬだろうと暗に脅されたら、断るなんて無理だ。断ったら、イークリッドがどうなったかなんて知る機会はないと思うけれど。

だが引き受けるにしても、もう一点知っておかなければならないことがあった。

「聖女って無給？」

「はい？」

口に運びかけた湯飲みを、トーマはこたつに戻してしまふ。それからまじまじと玲奈を見つめた。

「——あなた面白いことを言いますねえ……」

「今言ったでしょ。わたしは就職活動中なの。働いてた会社がつぶれちゃって、仕事がないわけ。仮に聖女とやらを引き受けたとしても、ただ働きなんてできるはずないじゃない?」

玲奈を見つめるトーマの口元に苦笑いが浮かんだ。つけつけと玲奈は続ける。

「今までの聖女はどうだったの? まさか戦わせるだけ戦わせておいて、お役目が済んだらハイさようなら?」

ぶんぶんとトーマは首を横に振った。

「まさか! きちんと財宝をお持ちいただきましたよ。一生困らないほどの金額になるものをお渡ししてきましたとも」

「記憶がないのに財宝だけ持つてるのってすごく怪しい。盗んできたって思われたりしないの?」

というか、かなりの確率で盗んできたと思われるのではないか。歴代聖女たちが『聖女』として働いたことなど、周囲の人間は知らないのだから。

「記憶は消しますが、アフターフォローはその時々でちゃんとやらせていただいておりますよ。昔は神様とか妖怪の仕業しわざにしておけば、皆さん納得してくれたという話なんですけどねえ。近頃はいろいろと難しいですよね」

頬に手をあて、深々とトーマはため息をついた。

「とはいえ、玲奈さんがお辞めになるまでには何か理由を考えて財宝を——」

「やだ。現金がいい」

「……現金、ですか」

「財宝って、金の延べ板とか宝石とかでしょ? そんなもの渡されても困るんだってば。売り払うの面倒でしょ? よく知らないけど品質保証書とかないとだめなんじゃないの?」

「そうですねえ……」

トーマは顎あごに手を当てて考え込む。

それからこたつに置いてあるみかんを取って、無言のまま皮を剥いた。中の房を一つ取り、丁寧に白い筋をとってから口の中に放り込む。みかんを一つ食べ終えるまで、彼は口を開こうとしなかった。

「一日五千円でいかがですか?」

「やすっ！ 一万五千元！」

玲奈はすかさず金額を吊り上げた。三倍は吊り上げすぎのような気がするが、頼まれてやる以上言い値で引き受けるわけにもいかないのだ。

「それは暴利というものですよ！」

「命かけるんだから当然でしょ？」

「……八千円でいかがです？」

「やだ！」

「では……一万円で」

よし！ 寝床と二食付きなら許容範囲だろう——あんな危なそうな仕事にしては安すぎる気もするけれど、無敵と言って過言ではないくらいに魔力と身体能力を持つことから、死ぬことはないはずだ。目の前の男を信用するならの話ではあるが。

すぐ飛びつくのもどうかないと思いつつ、そのまま手を差し出すと、トーマは空中から取り出したビールの缶をその手に握らせる。それを受け取ってから、玲奈は不承不承を装って口を開く。

「引き受けてもいい……かな？」

「あ、ありがとうございます！」

「……痛い……」

トーマは満面の笑みで、玲奈の手を握った。思いきり握り締められた両手が痛い。

「ではですね！ 明日の朝、ここにいらしてください。陛下に謁見えうけんできるよう手配しておきますから！」

「え？ あ、はい？」

謁見？ 陛下？ 耳慣れない単語にとまどっている間に、手の中に紙片が滑り込んでくる。

「それではまた明日！」

バイバイとトーマが手を振る。すると玲奈が返事をする前に、彼の姿は消え失せた。

一人取り残された玲奈は目を瞬しじたかせた。

つい一瞬前まで鏡張りの部屋にいたはずなのに、いつの間にか自分の部屋の床に座り込んでいる。周囲にあるのは見慣れたいつもの六畳ワンルームだった。壁にかけられた予備のスーツ。朝直すのをさぼって寝乱れたままのベッド。

「あ！ 靴、靴は！」

就職活動用に新しく買ったパンプスが見あたらない。高かったのに、ときよろきよるとすると靴は窓の側に転がっていた。玲奈は近づいてそれを拾い上げる。

夢ではないかと思っただけれど、床には買った覚えのないビールの缶が散乱している。そして手の中には、見たことのない住所が記された紙が残っていた。

* * *

とんでもない体験のせいかあまり寝ることができず、翌朝も七時には起きてしまった。ふと見ると、住所を書いた紙は昨夜テーブルに置いた時のままだった。

「……行った方がいいのかな……」

一晩たつてみると、やっぱり昨日のことは夢だったのではないかと思えてくる。本当にこの住所が存在するかどうか、まず携帯で地図を調べてみることにした。

「実在してる……」

どうやら自宅アパートから徒歩圏内のようなのだ。とりあえず行くだけ行ってみようか。どうせ今日は何も予定はないのだし。

朝食後、ジーンズにダウンコートという至って気楽な格好で、玲奈はアパートを出た。今日も厳しい冷え込みは続きそうだ。早く夏になればいいのに。

「……(´▽｀)」

指定された住所にたどり着いてみれば、そこは高い塀に囲まれた立派なお屋敷だった。ぐるりと塀に沿って一周してみようけれど、入り口らしきものは正面玄関と小さな裏口だけ。塀の上を見ると、ぎざぎざとした金属片が並んでいる。どうやら防犯対策はばっちりのようなのだ。

塀の透かし模様からわずかに見える屋根には、立派な瓦が載っている。その屋根も塀からかなり離れた場所にある。一周するのにだいぶ時間がかかったことも考え合わせると、広大な敷地を持つお屋敷のようだ。

「……まさか、ねえ」

他の世界からやってきた人が、こんな目立つ豪邸に住んでいるものだろうか。間違つてやしないかと、握りしめてきた紙片と近くにある電柱の住所を何度も見比べる。

「あ」

思わず声が漏れたのは、門についている表札に気づいたから。そこには「東間慎二」と記されていた。

チャイムを押すべきか、否か。ここまで来てもまだ、玲奈は迷う。

やっぱり帰ろう。くると回れ右をしようとした時、

「お待ちしていましたよ！」

という陽気な声とともに中から門が開かれ、昨夜顔を合わせた男が出てくる。「え、あ、どう、どうも……?」

逃げ出すこともできずに玲奈はその場に立ち尽くした。

「お待ちしていた」の言葉から判断すると、どうやら昨夜のことは現実ということ間で違いならしい。厄介なことを引き受けてしまったと、少し後悔する。

「さあさあ、どうぞどうぞー。いやーいらっしやらなかつたら、お宅まで記憶消去にかがうところでしたよ。それはそれで面倒なので、本当に引き受けていただけでよかったです。あ、あの後お給料の交渉もちゃんとしておきましたよ。オーケー出たから問題ありません」

断る間もなくべらべらとしゃべったトーマは、玲奈を門の中へと招き入れる。

門の先に広がっていたのはだだっ広い庭園だった。日本庭園、というのが正しい表現なのだろうか。きれいに刈り込まれた灌木があり、小川が流れて、時々「かーん」という鹿おどしの音まで聞こえてくる。

平たい石がいくつも敷かれた小道を先に歩くトーマは、昨夜同様、しつかりスーツを着込んでいた。スーツは上質の仕立てらしく、皺一つない。

無駄にぐねぐねと曲がった石の道を歩いて、ようやく母屋の前に到着する。

「……」

立ち止まった玲奈はここでまた絶句した。近くでよく見れば庭だけじゃなくて、建物もでかい。

そこにあったのは、白塗りの壁に灰色の瓦という『和』の要素をメインにしつつも、絶妙のバランスで『洋』を取り入れた建物だった。玄関の扉は引き戸ではなく扉で、玄関から見る限り窓にはカーテンではなく、障子が備え付けられている。

「靴は持ってきてくださいね。あちらで必要になりますから」

玄関から中に入ると、長い廊下が続いている。

「さて、玲奈さん。覚悟はよろしいですか?」

「覚悟って……」

「なーんてね。ええと、ここが僕の書斎です。一応ちゃんと大学の仕事もしているんですよ、これでも」

玲奈は書斎に入って中を見回した。机が一つ。部屋の大半はたくさんの本を取めた本棚が占めている。ここは洋室っぽいのが、窓にあるのはやはり障子だ。

書斎の奥には、もう一つ扉があった。トーマはその扉を開いて玲奈を中へ導く。

「本当は靴のまま行き来できればいいのですけれどね、やはり日本家屋は靴を脱がない

といけませんから。でもこの習慣って合理的ですよ？ 靴履いたまま歩くと部屋汚れますし」

扉の先は、向かい側にもう一つ扉があるだけの小さな部屋だった。どうやらここが、昨日は鏡の間として現れた『ルート』に相当するところらしい。その時もあったが、異世界だというのに実家に帰るくらい気安さで行けるのだから笑ってしまう。

扉をくぐったら靴を履くようにと言われ、玲奈はそれに従う。スニーカーにしなればよかった。屈み込んで靴を履くのは少々面倒くさい。

「昨日と同じここに出るの？」

「いえ、その扉の向こう側は、聖騎士団の本部になります。玲奈さんのお部屋もこちらに用意させていただきました」

「聖騎士団の本部って？」

聖騎士団というのは、昨日見かけた男たちの集団だろう。

「聖騎士たちのための訓練所や会議室や診療所——そういった施設があります。あと聖騎士たちの官舎ですね。既婚者も休暇以外は官舎で生活するのが決まりですから」

トーマの説明によれば、魔物の出現は夜に限られているから、どうしても官舎に泊まり込む必要があるらしい。

「あ、ちなみに僕は聖騎士じゃありませんよ。僕は国王陛下の直下で聖女を探すために活動していて、聖騎士団とは協力関係にあるんです」

そう言いながらトーマが向かい側の扉を開くと、そこにも長い廊下が続いていた。

扉をくぐれば、こちらは昨日同様暑かった。玲奈はコートとセーターを脱いで小脇に抱える。

「国王陛下と謁見の予定が入っているんですが、その前に玲奈さんにはお支度をしていただきます。そのままの格好では王様もびっくりしてしまいますからねえ」

「支度って？」

たずねながら玲奈は周囲の様子を確認する。廊下の床はよく磨かれた木製だ。廊下の両側には一定間隔で同じような扉が並んでいるが、装飾などはまったくなく、実用一点張りだった。

「お着替えを。すべてこちらで用意してありますから」

「着替えて……」

長い廊下を通り抜け、階段を上って二階に到着する。それから、また長い廊下を経て着いた先は立派な居室だった。

「うわ、お姫様の部屋みたい……」

真つ先に目に入ったのは、扉の対面にある窓だった。そこにはレースのカーテンと光沢のある刺繡入りのカーテンが二重にかけられている。絨毯は複雑な模様が織り込まれた毛足の長い品で、踏むと柔らかく足の裏を押し返してきた。

部屋の中に目をやると、そこにあるのはまさしくお姫様ベッド。紺色の天蓋付きのベッドには、白いベッドカバーがかけられている。

「ここが玲奈さんの寝室になります」

「本当に？」

玲奈の目が丸くなった。こんなベッドで寝ていたら、熟睡しすぎて呼ばれても起きられないのではないか。

「あちらが浴室、その向こうが居間というか寛ぐためのお部屋ですね。廊下からも入れますが、中の部屋は全部つながっています。客人にお会いになるのでしたら、居間の他に客間もありますので、そちらをお使いになってください」

聞いただけで目眩がしてくる。今住んでいるアパートの一体何倍の広さなのか。この寝室だけで、二十畳近くありそうだし。

「それでですねー、ここがクローゼットになるわけですよ」

壁際につかつかと歩いていったトーマが、そこにあつた扉を開いた。中には、鮮やか

なドレスが何着も詰めこまれている。

「ドレス……？」

「ええ、聖女様のために用意させていただきました。国王陛下に謁見するのに、その格好は不適切ですからねえ。好きなものをどうぞ」

「好きなものって……」

クローゼットの中のドレスをかき分けてみる。

ドレスはどれもたつぷりと生地を使い、刺繡が施されていたり、フリルやリボンやレースがあしらわれていたり、限界まで飾り立てられている。身につけたら、装飾の中に埋もれてしまいそうだ。

時と場合と場所に合ったドレスを選ばなければならぬのだろうが、どれが適切なものなのかわからない。

「それでも大丈夫なの？」

「大丈夫ですとも。一人でお召し替えするのは無理でしょうから、侍女をよこしますね」

「はあ……」

国王に謁見するというのはそれほど大変なことなのだろうか——大変なことなのだろう、たぶん。

シャツにジーンズという自分の格好を見下ろして、玲奈は納得した。王様なんて会ったことはないけれど、たぶんこのままではマズイ。

「このドレス、サイズ合ってるかな」

「合ってますよ。僕、一目見れば女性のサイズなんて簡単に見当つきますから」

「……歩くメジャーか！」

歩くメジャーなんて言い方では済まないような気もするけれど。玲奈が強烈な補正下着を着けていたらどうなるのだろう。正確にサイズをはじき出すことができるのだろうか。

「とはいえ、たぶんそのままじゃ若干きついんで、コルセットしないとだめです。侍女にきちんと締めてもらってくださいねー。美人さんと呼んでありますから」

コルセットなんて締めたことない。いくらなんでもそこまでウエスト太くないだろうと玲奈がぶりぶりしている、部屋を出ていったトーマと入れ違いに、若い女性が二人入ってきた。二人とも紺のワンピースに白いエプロンをつけている。

「え……ふた……り……？」

「聖女様、お召し替えをどうぞ。わたしはエマと言います」

「わたしはバイオレットです」

エマは真つ赤な髪に灰色の瞳の、少々きつそうな娘だった。背が高く、紺のワンピースを押し上げている胸はものすごい迫力だ。そこに顔を埋めさせてくださいとか余計なことを口走りそうになって、慌てて口を手で押さえた。

バイオレットは白っぽい金髪に、名前の通り董色すみれがらの、くるくるとよく動く瞳が印象的な娘だった。背はそれほど高くないが、細身の身体はすらりとしていて、いかにも清楚な感じだ。

トーマの言葉通り、タイプは違えどどちらも美人だった。

「ああ……聖女様、ね……」

玲奈は額に手を当てる。目を閉じて、その呼び方を受け入れようとした。まだ慣れないないけれど、役目を引き受けた以上、慣れるしかないだろう。

数度深呼吸して、心を落ち着ける。それから目を開いた玲奈は悲鳴を上げた。

「え、ちょ、ま、ちよつと待ってえええええ！」

どう見てもエマが持っているのは拘束具だ。思わず後退する玲奈にエマが微笑みかける。

「女性の魅力は細い腰ですから！」

エマの豊かな曲線美を見れば一瞬締めてもいいかなという気にはなるけれど、現実

そんなものでウエストを締められたら死んでしまう。

「無理だって！」

もう一歩後退した玲奈の腕をバイオレットが掴んだ。

「では」

バイオレットがもう一方の手に持っているのは、真っ白なフリルとレースの固まり。

「ちよい、ま、ちよい待ってって言ってるのにいいいいい！」

それが下着であることに気づいた玲奈の声が、部屋中に響きわたった。

第二章 酒が好きで何が悪い

あの二人、妙に手際がよかった。

あつさり玲奈をひん剥むいたと思ったら、コルセットで締め上げ、裝飾過多のドレスの中に押し込んだ。そのまま玲奈は中庭に連れ出され、あつという間に馬車に引きずり込まれて現在に至る。

それほど長い時間乗っていたわけでもないのに、馬車の振動ですっかり気分が悪くなってしまう、城の前に着いた時にはぐったりしていた。

先に降りたトーマの手を借りて馬車を降り——というより、半分転げ落ち——玲奈は城を見上げる。

煉瓦れんがづくりのその建物は、全体的に四角く、頑丈そうな造りだった。『お城』といえば、玲奈は塔がいくつもある建物を想像するのだが、こちらは『ものすごく大きなお屋敷』と言った方が近い。

そのお屋敷の入り口までは長い外階段を上らなければならず、上り切ったところでよ

うやく衛兵が両脇をかためる扉にお目見えできた。後ろを振り返れば、馬車が遠ざかっていくところだった。そのはるか向こう側には、先ほど入ってきた門らしきものが見える。

前に向き直って衛兵に守られた扉をくぐり抜け、広大なホールを通過してその先の廊下へ進む。

トーマがずんずん進んでいくので、玲奈も必死についていくしかなかった。スカートが足にまとわりついて歩きにくい。やむなく両手で持ち上げて大股で歩いていると、振り返ったトーマが感心しないというように首を振る。

玲奈は思わず唇を尖らせた。仕方ないじゃないか。こんなずるずるしたもの着せられたことなんてないのだし。というより、こんな格好をさせられる理由がわからなくなってきた。トーマがスーツなら、自分もスーツでよかつたんじゃないだろうか。

ふと辺りを見れば、お城とかいう割に、壁は白い壁紙が張られているだけの至ってシンプルなものだ。これなら玲奈に与えられた部屋の方が豪華に見える。

その代わりなのだろうか。扉には全て精緻な彫刻が施されており、玲奈は、高そうだけれどいくらくらいなのかなあ、などと無粋なことを考えてしまった。

「王様って何歳？」

赤い絨毯が敷かれた廊下を歩く間、黙っているのもどうかと思ひ、問いを投げかけてみる。馬車の中ではぐったりしていて、これから顔を合わせる相手のことを聞く余裕もなかった。

「若いですよー。玲奈さんと同じくらいでしょうか。あ、玲奈さんおいくつです？」

「こっちじゃ女性に年を聞くのはマナー違反じゃないの？ まあ、いいけど。今年二十四」

「ああ、それじゃ陛下の方が一つ上です」

やけに声が響くなあと思ひながら、トーマに案内されるままに歩いていく。

しばらくして、一際立派な扉の前でトーマは足をとめた。今まで見た扉より一回り大きく、彫刻のあちこちに金が使われている。そして城の入り口同様、制服を身につけた衛兵が両脇をかためていた。

「ここが謁見の間です。玲奈さん、入りましょう」

扉の向こうは、とんでもなく広い部屋だった。この広さならバスケットボールくらいできそうだ。正面には、背もたれが透かし彫りになり、座面には金と銀の刺繍が施された立派な椅子が置かれていた。これが王座というものだろうか、そこに人の姿はない。

スカートの裾に苦心しながら王座の前までたどり着くと、触れの声が響いた。